

大阪学院大学
外国語論集
第78号

LI構文の派生とその理論的帰結 (2)

..... 川 本 裕 未 1

研究ノート

外国語（ドイツ語、英語）学習について思うこと

..... 松 本 和 朗 25

翻訳

抄訳 テネシー・ウィリアムズ作『カミノ・リアル』(16場)

..... 平 松 良 康 43

2019 年 12 月

大阪学院大学外国語学会

大阪学院大学
外国語論集
第78号

2019 年 12 月

大阪学院大学外国語学会

LI 構文の派生とその理論的帰結 (2)

川 本 裕 未

3. Left Periphery

川本 (2019) で、LI 構文において前置された場所句は、SPEC-T に A 移動⁶し、T の持つ EPP 素性を満足させ、その後 TP の外側へ A-bar 移動していると結論づけた。しかしながら、そこでは LI 構文の場所句が、主語、つまり SPEC-T に位置する要素と同様の特性を有するいくつかの事例を提示し、さらに話題化された要素とも共通の特性を示す現象を挙げたに過ぎない。本稿では、LI 構文の派生において場所句が SPEC-T にいったん入った後、TP の外側に移動することによって、なぜ主語や話題化された要素と同じ特性を共有することになるのかについて、川本 (2019) で挙げた各事例をめぐり、極小理論の観点から説明を試みる。

まずは、場所句は具体的に TP の外側のどの位置に移動しているのかについて、Rizzi (1997) や Cinque (1999) にもとづいて検討する。以下の例文が示すように、LI 構文の場所句は補文内の補文標識 *that* の右側に生起していることから、その移動先は CP 指定部ではない。では、いったいどこに移動しているのであろうか。

- (34) a. The scout reported that beyond the next hill stood a large fortress.
b. It was written in the plans that over the entrance should hang the gargoyle.

(Hooper and Thompson 1973)

話題化に関しても状況は同様である。話題化された表現も補文標識の右側に位置していることから、その移動先は CP 指定部ではない。

(35) It was decided that this building, they would demolish.

Rizzi (1997) は left periphery、つまり命題を表す IP (TP) の左側部分の構造について詳細に検討し、時制やモダリティ、焦点や話題等の情報構造をも含んだ談話領域と命題を結びつけるインターフェイスの役割を担う部分として、従来の CP を分割し、以下のような the cartography of syntactic structures を提案している。

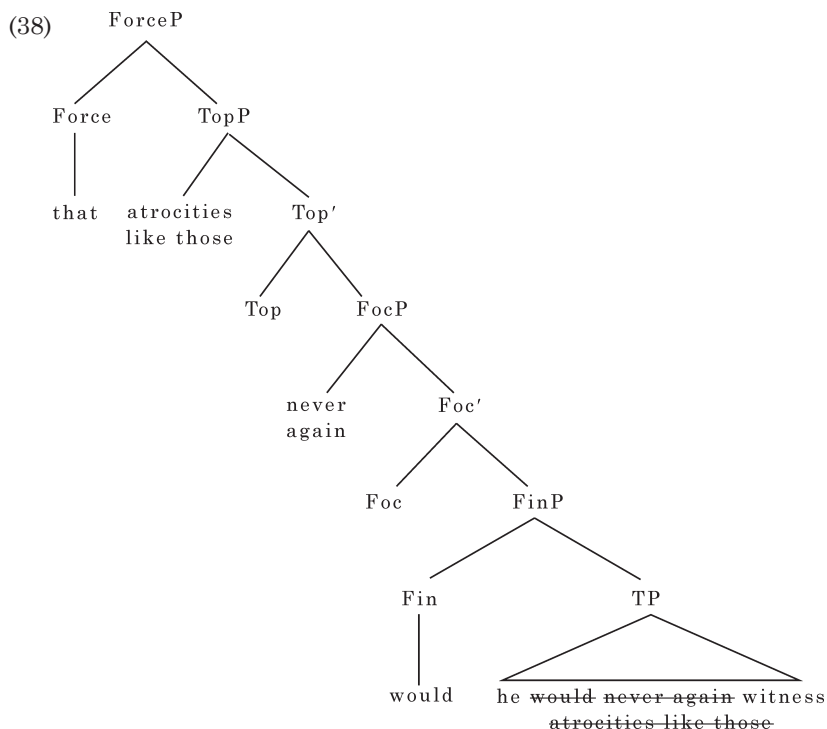
(36) ... Force ... (Topic) ... (Focus) ... Fin IP⁷

(Rizzi 1997)

Focus と Topic は随意要素で、その指定部に入る要素をそれぞれ焦点および話題として認可する。例えば以下の (37) における第2文の動詞 prayed の補文 (that 以下のイタリック体の部分) は (38) のような構造を持つとされる。

(37) He had seen something truly evil—prisoners being ritually raped, tortured and mutilated. He prayed *that atrocities like those, never again would he witness.*

(Radford 2009)



つまり、(37) の第 2 文において、*that* は declarative の Force marker として Force の位置に、*atrocities like those* は前文で述べられているレイブなどの残虐行為を指す既知情報を再度話題にするものとして *witness* の目的語の位置から TopicP の指定部に、そして *never again* は強調される新情報、つまり焦点として TP 内部から FocusP の指定部にそれぞれ移動する。

LI 構文の場所句は既知情報として再度話題にのぼる表現であることから、上記の *atrocities like those* と同じく、TopicP の指定部に位置すると考えられる。LI 構文の場所句、および話題化文の話題要素が TopicP の指定部に移動していることは、下記の疑問文が非文になることからその妥当性が支持される。

(39) a.*Will down the hill roll the baby carriage?

b.*Down the hill will roll the baby carriage?

(40) a.*Will this book, you really buy?

b.*This book, will you really buy?

LI 構文の (39a-b) および話題化文の (40a-b) において、a 文では助動詞 **will** が場所句や話題要素の左側に来ているのに対し、b 文では助動詞 **will** が場所句や話題要素の右側に来ている、いずれも非文である。場所句や話題要素が TopicP の指定部に位置していると仮定することで、上記のいずれの派生も適切ではないことを以下のように説明することができる。

Rizzi (1997) は、(38) における **would** が示すように、Finite head が助動詞を誘引して疑問文が派生されるとしている。そうであれば、(39a-b) と (40a-b) においても助動詞 **will** は T head から Finite head に移動しているはずである。ところが、(39a) と (40a) では TopicP の左側に助動詞が来ており、助動詞の移動先である FiniteP は TopicP の右側に位置することから、ありえない構造として排除される。

(41) a.*Will [_{TopP} down the hill roll the baby carriage]

b.*Will [_{TopP} this book, you really buy]

さらに、Finite head による助動詞の誘引は、上位に位置する疑問の Force head から疑問の素性を継承したうえで、Finite head が T との間で Agree 関係を構築し、その Agree 関係に基づいて行われていると考えられているが、(39b) および (40b) では、間に Topic head が介在することで、Force head と Finite head の間の素性継承が阻止されるため非文となる。

- (42) a. $\begin{array}{c} \text{---} \times \text{---} \\ | \qquad \qquad \downarrow \\ [\text{ForceP} \text{ Force } [\text{TopicP} \text{ Down the hill Top } [\text{FinP} \text{ Fin } [\text{roll the baby carriage}]]]] \end{array}$
- b. $\begin{array}{c} \text{---} \times \text{---} \\ | \qquad \qquad \downarrow \\ [\text{ForceP} \text{ Force } [\text{TopicP} \text{ This book Top } [\text{FinP} \text{ Fin } [\text{you really buy}]]]] \end{array}$

以上のように、LI 構文の場所句、および話題化要素が TopicP の指定部に位置すると仮定することで、LI 構文や話題化文における疑問文 (39a-b) と (40a-b) が非文となる事実を説明することができることから、これらの要素は TopicP の指定部に移動していると結論づける。

4. 極小理論による説明

川本 (2019) では LI 構文の場所句の分布特性として以下の点が提起された。

- (43) 主語との共通点
- a. Do-support を受けない
 - b. that・痕跡効果を受ける
 - c. 演算子の作用域に偏りがある
- (44) 話題化された要素との共通点
- a. 既知情報である
 - b. 主語節内での適用が許されない
 - c. ECM 補文内での適用が許されない
- (45) 話題化された要素との相違点
- 弱交差を許す

上記のうち、(44a) の既知情報に関しては、前節で規定したように話題化された要素同様、LI 構文の場所句は TopicP の指定部に移動し、Topic head によって認可されるということで説明される。また、(44c) の ECM 補文内での適用

の不可能性に関しては、川本 (2019) で既に述べているように、ECM 補文は CP を欠いた不完全な TP (Rizzi (1997) の Left Periphery のアプローチを採用するなら、ForceP、TopicP、FocusP、FiniteP を欠いた不完全な IP) であるので、補文内に移動の着地点を持たず、そのため、話題化も LI も適用することができないということになる。したがって本節では、(44a) と (44c) を除いたその他の点について検討していくことにする。(具体的には本論で (44b) と (45) を議論し、(43a-b) は次回の Part 3で論じる。)

4.1 主語節内での適用が許されないことについて

まず、LI 構文の場所句と話題化された要素の共通の分布特性の一つとして挙げた (44b) から検討する。LI、および話題化は補文内での適用は可能であるが、主語節内で適用することはできない。

- (46) a. The scout reported that beyond the next hill stood a large fortress.
 b. It was written in the plans that over the entrance should hang the gargoyle.
 c.*That over the entrance should hang the gargoyle was written in the plans.

(Hooper and Thompson 1973)

- (47) a. It was decided that this building, they would demolish.
 b.*That this building, they would demolish was decided.

以下では、なぜ主語節において LI や話題化を適用することができないのかという疑問に関して、まず談話的情報伝達の面から、主語節と叙実述語補文を分析し、これらの節の構造を提案する。そしてその LI や話題化を許さない構造は定の制限用法の関係詞節にも当てはまることを指摘し、その統語的特徴を傍

証として、本論で提案する構造の妥当性を主張する。

4. 1. 1 断定か前提か

補文内と主語節内の要素の分布の違いに関して、Hiberno-English と呼ばれるアイルランドで話されている英語変種が興味深い事例を提供してくれる。以下はアイルランド出身の作家の Roddy Doyle、James Joyce、John McGahern、Frank McGuinness の作品からの引用である。(McCloskey (1992), Henry (1995))

- (48) a. I wondered [would I be offered the same plate for the whole holiday].

Roddy Doyle: *The Woman Who Walked into Doors*, 154

- b. She asked the stewards [was any member of the committee in the hall].

James Joyce: *Dubliners*, 170

- (49) a. The baritone was asked [what did he think of Mrs Kearney's conduct].

James Joyce: *Dubliners*, 176

- b. You'd be better off asking [why did he marry me].

Frank McGuinness: *Dolly West's Kitchen*, 55

尚、(48a-b) および (49a-b) は次の (50a-b) のように直接疑問文の一部に主節が付加された表現とは異なることに注意されたい。

- (50) a. Is he coming along, I wonder.

- b. Where is Mom, the little boy wondered.

(48a-b) および (49a-b) の括弧で囲まれた補文部分では主節の動詞との時制の一致や主節の影響を受けた代名詞の選択をしていることから、当該部分は直接話法節ではなく間接話法節である。

(48a-b) は補文が Yes-No 疑問文、(49a-b) は補文が wh 疑問文の場合であるが、いずれの場合も Hiberno-English では動詞補部に interrogative の文タイプの補文が来た場合（つまり間接疑問節が来た場合）、主語・助動詞倒置が起こり、補文 T にあった *would*、*did*、*was* などがそれぞれ T-to-C 移動をしている、或いは Rizzi (1997) の Left Periphery 理論にしたがうなら、それらは T から Finite head に移動していることになる。

(51) a. I wondered [_{ForceP} [_{FinP} [_{Fin} *would*] [_{TP} I [_T *would*] be offered the same plate for the whole holiday]]].

b. The baritone was asked [_{ForceP} what [_{FinP} [_{Fin} *did*] [_{TP} he [_T *did*] think of Mrs Kearney's conduct]]].

つまり、Hiberno-English では文タイプが interrogative の時、標準英語と異なり、主文だけでなく補文においても T-to-Finite 移動が適用されるのである。しかし、そのような特性を持つ Hiberno-English であっても、主語節で主語・助動詞倒置が起こることはない。

(52) *[How many people should you invite] depends on how big is your place.

(McCloskey 1992)

さらに、補文であっても叙実述語 (factive Predicate) の補文は主語・助動詞倒置を許さない。

(53) a.*The police discovered [who had they beaten up].

b.*I remember clearly [how many people did they arrest].

(McCloskey 1992)

非叙実述語の補文内の T-to-Finite 移動を許す Hiberno-English が、主語節や叙実述語補文の T-to-Focus 移動を禁止するのはなぜであろうか。

非叙実述語の補文は話者が真実性の判断を下している、つまり話者が断定 (assert) しているだけで、真であることを前提にしているのではない。したがって、主文が negative になった場合、その影響を受けて偽になり得る。一方、文主語や叙実述語補文の命題は断定内容 (assertion) にはなり得ない。以下の例が示すように、否定文内にあっても文主語や叙実補文の命題は否定されることがないことから、話者は文主語や叙実述語補文の命題が真であることを前提 (presupposition) にしていることが示される。

(54) I didn't think that my mother was ill, and in fact she wasn't ill.

(55) a.*I don't regret that I left school before graduation, and in fact I didn't leave school.

b.*That I had left school before graduation didn't infuriate my parents, and in fact I hadn't left school.

文主語や叙実述語補文が前提を表しているのであれば、それらは discourse-old information (既出情報)、familiar information (既知情報) ということになる。前提、既出・既知情報の命題を持つ ForceP がその中にさらに既出情報を認可する TopicP や新情報を認可する FocusP を持っているとは考えづらい。したがって、文主語および叙実述語補文の ForceP には TopicP や FocusP が投射できないと考えられる。このことは、さらに関係代名詞節の統語的・談話的特徴からも裏付けされる (4.1.3節)。

4.1.2 主語節および叙実述語補文の統語的特性

非叙実述語補文は代用表現として *it* および *so* を取ることができるが、叙実述語補文は代用表現として *so* を用いることができず、より名詞的な特性を持つ *it* しか用いることができない。

- (56) a. John supposed [that Bill had done it], and Mary supposed [it/so] too.
 b. John regretted [that Bill had done it], and Mary regretted [it/*so] too.

(Kiparsky and Kiparsky 1970)

同様に、主語節を受ける代用表現も *it* であり、さらに主語節は再帰代名詞 *itself* の先行詞として機能することができる。

- (57) a. [That Bill had lied] disappointed me, and [it/*so] disappointed my father, too.
 b. [That Bill had lied] itself disappointed me greatly.

以上のことから、主語節および叙実述語補文 **ForceP** は定名詞 (definite nominal) 的特性を持ち、以下のように **DP** に支配されていると考えることができる。

- (58) [_{DP} [_{ForceP} ...]]

4.1.3 関係代名詞節

関係代名詞節には制限用法と非制限用法があるが、この2つの用法の間で主語・助動詞倒置や **LI** 構文の容認性について違いが見られる。

- (59) a. *The car that only rarely did I drive is in excellent condition.
 b. This car, which only rarely did I drive, is in excellent condition.
 (Hooper and Thompson 1973)
- (60) a. *The rotunda in which stands a statue of Washington will be repainted.
 b. The rotunda, in which stands a statue of Washington, will be repainted.
 (Hooper and Thompson 1973)

(59a-b) が示すように、否定表現の前置に伴う主語・助動詞倒置は制限用法の関係詞節では適用できないが、非制限用法の関係詞節内では適用可能である。また、LI を適用した (60a-b) でも、制限用法の関係詞節は非文であるが、非制限用法の関係詞節では文法的である。このように、主語・助動詞倒置、および LI の文法性に関して、制限用法の関係詞節は前節で論じた主語節や叙実述語補文に対応し、一方、非制限用法の関係詞節は非叙実述語補文にそれぞれ対応する。

以上、関係詞節の統語的特性について見てきたが、次に関係詞節の情報伝達機能について考察する。不定の関係詞節を用いている (61a) の持つ意味は「私は本を読みたくなのではなく、読みたくなのは先生が推薦する本だけだ」であり、否定されているのは「本」ではなく、関係詞節の方である。

- (61) a. I don't want to read a book which the teacher recommends.
 b. I don't want to read the book which the teacher recommends.

仮に関係詞節を削除して I don't want to read a book. とした場合、文意が変わってしまい、「私は本全般を読みたくな」となる。文中で否定されるのは情報価値の高い新情報部分だとすれば、(61a) では不定の関係詞節が文全体の

伝達内容のなかで主節よりも中心的な情報を表していることになり、明らかに断定的である。それに対して、定の関係詞節を用いている (61b) は「私が読みたくないのはその本である」という意味を持ち、仮に関係詞節を削除しても意味は変わらない。関係詞節は、私が読みたくない本はどのような本なのかを特定しているに過ぎず、情動的には重要度の低い旧情報であり、前提を示している。

一方、非制限用法の関係詞節を用いた文では、伝達される情報が主節部分と関係詞節部分の2つに分割されていると考えられる。非制限用法の関係詞節を含む (62a) の問いに対して、(62b) のように関係詞節も含めて答えた場合、容認度が落ちる。これは (62a) の質問の対象が主節の内容に限られ、関係詞節の内容は含まれていないことを示している。

- (62) a. Did you read Schwartz's exam, which I left on your desk?
 b. ??Yes, I read Schwartz's exam, which you left on your desk.
 c. Yes, I read Schwartz's exam.

(McCawley 1981)

さらに、非制限用法の関係詞節は付加疑問文にすることができる。

- (63) a. *I just ran into the girl who was your roommate at Radcliffe, wasn't she?
 b. I just ran into Susan, who was your roommate at Radcliffe, wasn't she?

(Hooper and Thompson 1973)

制限用法の関係詞節の命題に対して付加疑問文を作ることはいできないが、非制限用法の関係詞節の命題は付加疑問文にすることが可能であることから、

(63b) では、伝達される情報が主節と関係詞節の2つに分割され、ともに別々に断定が置かれていることになる。(62b) の応答文の容認度が低かったのは、(62a) は主節の命題についての真偽を尋ねているのに、(62b) では別の断定的命題の関係詞節まで含めて返答しているからである。

これまで考察した非叙実述語補文、叙実述語補文、主語節、そして制限用法の関係詞節と非制限用法の関係詞節をまとめると、次のようになる。ただし、4.1.2節で指摘したように、今問題にしている主語節（および叙実述語補文）は定名詞の特性を持つことから、ここでの議論で必要となってくる関係詞節は定の関係詞節であるので表中には定の関係詞節のみを載せている。

(64)

		主語・助動詞 倒置	LI (and 話題化)	情報機能
非叙実述語補文		△	○	断定
叙実述語補文		×	×	前提
主語節		×	×	前提
定の	制限用法の関係詞節	×	×	前提
	非制限用法の関係詞節	○	○	断定

非叙実述語補文の主語・動詞倒置の欄が三角になっているのは、標準英語では主語・助動詞倒置は許されないが、**Hiberno-English** では可能なためである。標準英語では補文 C の持つ素性の特性の違い⁸ から主語・助動詞倒置が排除されるが、その点を除けば英語は非叙実述語補文での主語・助動詞倒置が可能であると考えられる。上記の表から、主語・助動詞倒置と LI（および話題化）が可能なのは情報機能に断定を置いている場合であり、逆にそれらの操作が不可能なのは、情報機能に前提が置かれている場合であることが示される。4.1.1節で前提、既出・既知情報の命題を持つ主語節と叙実述語補文の **ForceP**

は新情報や旧情報を認可する **TopicP** や **FocusP** を投射しないと提案したが、もしこの提案が正しければ、主語節や叙実述語補文と同じ特性を持つ定の制限用法の関係詞節も同様に **TopicP** や **FocusP** を投射していないと考えるのが妥当である。

さらに、定の制限用法の関係詞節が **FocusP** を投射していないことを裏付ける別の証拠が、関係詞節への文副詞の挿入の可否から導き出される。

- (65) a. *The only paper that, frankly, I didn't understand was hers.
 b. John, who, frankly, was incompetent, was a friend of mine.

非制限用法の関係詞節では文副詞の **frankly** を挿入することが可能であるのに対して、制限用法の関係詞節に **frankly** を挿入することは許されないという事実から、前提を担う **ForceP** には文副詞が融合 (**Merge**) すべき **FocusP** が欠落していることが示唆される。このことから、表 (64) において定の制限用法の関係詞節と同じ特性をもつ主語節（および叙実述語補文）も **FocusP** を投射していないこと、ひいては **FocusP** と同様に情報構造を担う **TopicP** も投射していないことが示唆され、この関係詞節の事実からも、主語節には **LI** 構文の場所句、および話題化文の話題要素が移動する到達点がないという結論が導かれる。

この第4.1節のテーマは **LI** と話題化の共通点の1つである (44b)、すなわち「主語節内での適用が許されない」に対して統語的な説明を与えることであった。考察の結果、主語節は情報伝達機能上前提を担うことから、その **ForceP** は **TopicP** と **FocusP** を投射しておらず、**LI** 構文の場所句や話題化要素に移動先を提供することができないことになり、そのため **LI** と話題化を適用することができないという結論を得るに至った。

4.2 弱交差を許すことについて

話題化文と同様の分布を示すことの多い LI 構文であるが、(45) で示したように弱交差に関しては話題化文は非文となるが、LI 構文は弱交差を許す。

(66) a.*Into every dog_i's cage, its_i owner peered.

b. Into every dog_i's cage peered its_i owner.

(Culicover and Levine 2001)

交差効果とは、wh 句が同じ指標を持つ代名詞を越えて移動し、以下のような構造を作り出すことをいう。

(67) wh_{2i} ... pronoun_i ... wh_{1i}

(67) において元位置の wh_{1i} が中間の代名詞に C 統御されている場合は強交差と呼ばれ、容認度は著しく低い。以下の (68a) が強交差の例であり、その派生は (68b) のように表される。

(68) a.*Who_i does he_i think can fly?

b.*Who_{2i} does he_i think who_{1i} can fly

who_{1i} は who_{2i} に束縛⁹ される変項 (variable) であるため、項束縛 (A-binding) されることは許されない。しかしながら、(68b) では who_{1i} は項の位置にある代名詞 he_i に C 統御され、且つ同一指標を有しており、代名詞 he_i によって項束縛されていることになるため非文となると考えられる。一方、(69a) のように、その派生を表す (69b) において代名詞が who_{1i} を C 統御していない場合を弱交差と呼ぶ。

(69) a. ?*Who_{2i} does his_i mother love?

b. ?*Who_{2i} does his_i mother love ~~who_{1i}~~

代名詞 his_i は who_{1i} と同一の指標を与えられているが C 統御の関係ではないので who_{1i} を束縛はしていない。そのため完全な非文にはならない。Koopman and Sportiche (1982) は (69) が強交差ほどではないが容認性が低くなっている理由について以下の Bijection 原理を用いて説明している。

(70) The Bijection Principle:

Each operator binds one and only one variable, and each variable is bound by one and only one operator.

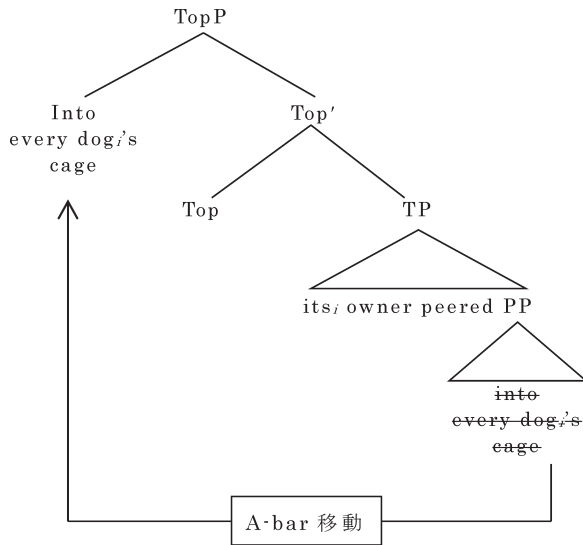
variable (変項) は以下のように定義される。

(71) α is a variable if it is in an A-position and is locally A-bar bound.

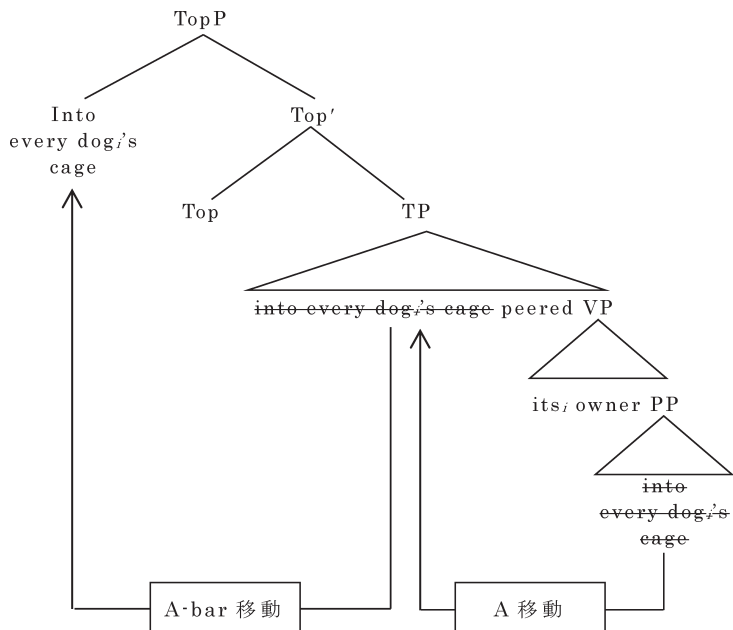
(69) では演算子 Who_{2i} が his_i と who_{1i} の2つの変項を束縛しているため文法性が下がると Bijection 原理から説明される。

話題化文と LI 構文の容認性に関するコントラストを表す (66a-b) に立ち返ると、話題化文の (66a) と LI 構文の (66b) はそれぞれ (72a)、(72b) のような構造を持つ。

(72) a.



b.



話題化された構成素と LI 構文の場所句は最終的に TopicP の指定部に A-bar 移動するという点で共通しているが、話題化要素は直接 TopicP の指定部に A-bar 移動しているため、元位置の *into every dog's cage* は (71) により、TopicP の指定部の *into every dog's cage* に A-bar 束縛される変項ということになるのに対して、LI 構文の場所句はいったん SPEC-T に A 移動してから TopicP に A-bar 移動しているため、元位置の *into every dog's cage* は局所的に SPEC-T にある *into every dog's cage* に項束縛されていることになり、変項ではない。(72a) では TopicP の *every dog's* が *his* と元位置の *every dog's* の2つの変項を束縛しているため、Bijection 原理により排除される。一方、LI 構文の (72b) では元位置の *into every dog's cage* は変項ではないので Bijection 原理の対象にはならず、さらに中間の SPEC-T に位置する *into every dog's cage* は TopicP の演算子に束縛される変項であるが、それと代名詞との位置関係は (67) の交差効果の構造をなしていないため（つまり、SPEC-T の *into every dog's cage* は同じ指標を持つ代名詞を越えて TopicT に移動しているわけではないので）、Bijection 原理を受けない。

以上のように、話題化要素が弱交差効果を受けるのに対して、LI 構文の場所句が弱交差効果を免れる事実を説明することができる。注目すべきは、この LI 構文と話題化文の弱交差に関する非対称性の説明において、LI 構文の場所句は一旦 SPEC-T に移動しているという川本 (2019) の主張が決定的な役割を担っている点である。このことから、この弱交差の事実は、LI 構文の派生に関する川本 (2019) の主張を裏付ける証拠となっていると考える。

(「LI 構文の派生とその理論的帰結 (3)」に続く)

注

- 6 Chomsky (2004) では、統語操作は一致 (Agree) と融合 (Merge) の 2 つのみに還元されるとし、移動 (Move) は融合の一種の内的融合 (internal Merge) として捉え直されている。しかしながら、本稿では A 移動と A-bar 移動を区別することが要所であることから、一貫して「移動」という用語を用いる。それに伴い、Chomsky (2004) が外的融合 (external Merge) と呼ぶ操作を「融合」と呼ぶ。
- 7 Chomsky (1986) は S を I (INFL) の最大投射 IP と分析したが、Chomsky (1995) は I を一致素性を担う Agr と時制を担う T に分離した。しかし、その後 Agr の存在は否定され、現在では TP と IP は同じ位置を指す。本稿ではこれ以降 TP で統一して表す。
- 8 Pesetsky and Torrego (2001) は、補文で主語・助動詞倒置を許す変種、言語は主節 C、補文 C とともに EPP 特性を有する解釈不可能な T 素性 (*u*T) を持ち、一方標準英語のように補文で主語・助動詞倒置を許さない変種、言語は主節 C の *u*T は EPP 特性を有するが、補文 C の *u*T は EPP 特性を持たないと提案している。尚、補文における主語・助動詞倒置は Hiberno-English に限られた特殊な現象ではなく、他のヨーロッパ言語でもいくつか観察される現象である。

i) Yiddish:

- a. Vet ir fregn, vos volt ikh gemakht mitn dritn milyon?
will you ask what would I done with-the third million
'Will you ask what I'd do with the third million?'
- b. Ikh farshtey nit vos iz dos far a verter.
I understand not what is that for a word
'I don't understand what kind of words those are.'

(Santorini 1995)

ii) Spanish:

Qué pensaba Juan [que le había dicho Pedro [que había publicado
what thought John that him had told Peter that had published
la revista]]?

the Journal

‘What did John think that Peter had told him that the Journal had
published?’

(Torrego 1984)

9 束縛 (binding) に関する用語の定義については Chomsky (1981) を参照。

参考文献

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2000) Minimalist Inquiries: The Framework. In: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalism in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2004) Beyond Explanatory Adequacy. In: Adriana Belletti (ed.) *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures*, Volume 3, 104-131. Oxford: Oxford University Press.

Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.

- Culicover, Peter and Robert Levine (2001) Stylistic Inversion in English: a Reconsideration. *Natural Language and Linguistic Theory* 19: 283-310.
- Diesing, Molly (1990) Verb Movement and the Subject Position in Yiddish. *Natural Language and Linguistic Theory* 8: 41-80.
- Doyle, Roddy (1996) *The Woman Who Walked into Doors*. London: Vintage Publishing.
- Henry, Alison (1995) *Belfast English and Standard English*. Oxford: Oxford University Press.
- Hooper, Joan B. and Sandra A. Thompson (1973) On the Applicability of Root Transformations. *Linguistic Inquiry* 4: 465-497.
- Joyce, James (1992) *Dubliners*. Dublin: The Lilliput Press.
- 川本裕未 (2019) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (1)」『大阪学院大学外国語論集』第77号.
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1970) Fact. In: Manfred Bierwisch and Karl Erich Heidolph (eds.) *Progress in Linguistics*, 143-73. Berlin: Mouton.
- Koopman, Hilda and Dominique Sportiche (1982) Variables and the Bijection Principle. *The Linguistic Review* 2: 139-60.
- McCawley, James David (1981). The Syntax and Semantics of English Relative Clauses. *Lingua* 53: 99-149.
- McCloskey, James (1992) Questions and Questioning in a Local English, MS., University of California, Santa Cruz.
- McGuinness, Frank (2002) *Dolly West's Kitchen*. London: Faber and Faber.
- Pesetsky, David and Esther Torrego (2001) T-to-C Movement: Causes and Consequences. In: M. Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 355-426. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Radford, Andrew (2009) *Analyzing English Sentences: A Minimalist*

Approach. Cambridge: Cambridge University Press.

Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. In: Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*, 281-337. Dordrecht: Kluwer.

Santorini, Beatrice (1995) The Syntax of Verbs in Yiddish, MS., Northwestern University.

Torrego, Esther (1984) On Inversion in Spanish and Some of Its Effects. *Linguistic Inquiry* 15: 103-130.

The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences: Part 2

Yumi Kawamoto

This part of the paper argues why Locative Inversion and Topicalization behave alike in that neither of them can be applied in a subject clause while they behave differently in that the former does not produce weak crossover effects but the latter does.

Given Rizzi (1997)'s split CP analysis, it follows that the locative phrase in the Locative Inversion construction (LIC) and the Topicalized phrase in the Topicalization construction both move to the specifier position of TopicP because they carry old information, which must be mutually known or assumed by the speaker and addressee for the utterance to be considered appropriate in context. Syntactically, the subject clause shows the same distribution as the complement clause of factive predicates and the definite restrictive relative clause: they permit the LIC and subject-auxiliary inversion. Pragmatically, those clauses all carry a presupposition, whose truth is taken for granted in the discourse, which leads to the assumption that they lack TopicP and FocusP. Thus, the impossibility of application of Locative Inversion and Topicalization in the subject clause is accounted for since there is no position to which the fronted phrases move.

The LIC seems to be exempt from weak crossover effects whereas the Topicalization construction is subject to them. This difference in grammaticality is explained by assuming the fronted locative phrase in the

LIC stops by at SPEC-T, which is an A(rgument)-position. Since the locative phrase moves to an A-position, its copy left behind in the original position is not a variable and therefore is not subject to the Bijection Principle, which regulates weak crossover effects. The locative phrase further moves to TopicP leaving behind a copy in SPEC-T. This movement, however, does not cross the pronoun which is coindexed with the locative phrase, and therefore the copy in SPEC-T is not subject to the Bijection Principle, either. The weak crossover data thus points strongly to the conclusion that the fronted locative phrase makes a stopover at SPEC-T before reaching TopicP.

外国語（ドイツ語、英語）学習について思うこと

松 本 和 朗

はじめに

大学を退職して自由の身になって、自分の外国語（ドイツ語、英語）が錆びついてしまっていることに気づき、何とかしなければならないという気持ちになった。その頃、たまたま、町の図書館で映画『エベレスト』（邦題のまま、2015年米英映画）を見る機会があった。1996年5月のエヴェレスト大量遭難事故を題材にした映画で、日本人女性登山家の難波康子も登頂に成功しながらキャンプに帰還できず遭難死している。この遭難事故に興味をもち、この時、登頂に成功し、無事生還したジョン・クラカワー（ジャーナリスト）の本など数冊を読んだ。いままでの外国語勉強法を繰り返しても駄目なのではないかと漠然と考えていたので、この映画や遭難記から最高峰登頂を目指す登山家の事前の準備や訓練などを参考に、勉強法を少し変えてみることにした。

第一に、「大海」の語学勉強と銘打って、実用に耐える外国語を目指すこととし、できるだけ十分な時間をとって勉強することとした。

第二に、受験勉強で身につけてしまった、なんでも暗記して詰め込むのではなく、頭の中に記憶として残るものを活かすやり方に切り替えてみることにした。

第三に、語学勉強を持続させるため、子どもが母国語を習得する過程を参考にしながら、精神的に落ちこまないように注意することとした。

上記3点に共通するのは、焦らず、十分な時間をとって外国語を勉強すると

いうことである。

なお、大阪学院大学退職時に書いた拙稿「グローバル時代の外国語の勉強について」(『大阪学院大学通信』平成26年3月号)は、現役時代の体験をもとに書いたものであるが、本稿は、喜寿になってから始めた外国語再勉強の報告であり、その続編にあたるものである。

第1部「大海」の語学を目指して

1、きちっとした外国語脳をつくる

人間の脳の中に母国語脳のほか、外国語脳を持つとして、きちっとした外国語脳まで発達させるには、当然、それなりの時間をかける必要がある。そうになると、外国語の勉強は、「小川」という限定的なものではなく、実用に耐える外国語という「大海」に乗り出すことが目標となる。

もともと、短期間で達成できる目標、たとえば一年間で文法を徹底的に学ぶことなど、「小川」の外国語を学ぶことも意味がある。自分が「大海」に乗り出そうとしたのは、現役を離れ、比較的自由な時間が得られるようになったからにすぎない。

① 外国語脳が小さくなり、消えていかにようにする

外国語が錆びついたとき気がついたことは、きちっとした外国語脳をつくらないと、外国語脳は小さくなり、消えていってしまうということである。ずっと使いつづけている母国語脳は発展していくが、その母国語脳ですら長年使われないと弱くなる。それよりはるかに弱い外国語脳は、強い母国語脳の圧力にさらされ、ほうっておくと当然小さくなるし、それどころか消えていってしまう。

② 外国語脳間の境界線を明確にする

複数の外国語脳がまだ十分固まっていないと、外国語脳相互間の境界線があ

いまいとなり、混乱が生じる。英語をしゃべっていると、ドイツ語が出てくるし、ドイツ語でしゃべっているのに英語しかでてこないことがよくある。また、単語だけでなく、それぞれの文法が入り混じってしまうこともある。

③ 外国語の言語環境に身をおく

脳の中に、母国語脳と並んで、しっかりした外国語脳をつくるには、外国語に頻繁に接しうる環境に身をおくことである。この意味で外国での実地体験から得られるものは多い。しかし、ある英語学の大家は、日本にいても英語研究ができるとして、何度も薦められた留学の誘いを断られたという話もある。留学や現地体験がなくとも、それが外国語勉強の絶対的な障碍になるわけではない。幸いグローバル化の進展、パソコンなどの技術進歩で、国内にいても、そうした言語環境をつくるのが昔に比べはるかに容易になっている。

2、日本語脳も強くし、二刀流、三刀流の使い手となる

日本語に習熟していなければ、外国語も本当にうまくならないと言われるが、確かに、日本語を話す以上に外国語を話すことはできない。外国語を学ぶことは、母国語を武器として強い宮本武蔵になることであり、たとえば、原書一冊を読むかわりに、日本語に翻訳された本を読んで済ますなど、日本語が大きな助けとなる。他方、母国語と外国語が同族語系の言葉だと、母国語脳と外国語脳がそれ程の違和感なく共存できるようにも思われるが、日本語が母国語で欧米系の外国語を使う場合は、欧米の言語習慣と真っ向から対立するため、日本の宮本武蔵は大奮闘を余儀なくされる（第2部4で後述する）。

3、精神的に落ち込まないこと

エヴェレストで遭難する登山家が後を絶たない。登山家は登頂に成功するだけでなく、生きて帰ってくことに意味がある。ロンドン留学中、夏目漱石が英語の世界に圧倒され、病気になった話もあるように、外国語勉強では、拒絶

反応を起こす、あるいは、うつ病などになる人が少なくない。子どもが母国語を学ぶときのプロセスを参考にしながら、以下のやり方で精神的に落ち込まないようにすることにした。

① 分からなくとも気にしない

子どもが母国語をマスターするのに病気になったケースはあまり聞かない。それは、子どもは言葉が分からなくても平気だからである。子どもが母国語を習得するプロセスを成人がそのまま適用するということではなく、分からない外国語の世界を子どものようにあまり気にしないで受け止めていくことにした。

② 外国語は徹底的にミスをしまくる

母国語をマスターするのに子どもは数多くのミスを重ねる。多くのミスを重ねることを、自分は4M (many, many, many mistakes) と名づけている。些細なミスを恐れて金縛り状態になって話せなくなる日本人が少なくないし、語学の才能がないからと早い段階で投げ出す人も多い。これらの人に対しては、「これまでどれだけミスを重ねたのですか」と尋ねて、「そんな少しのミスではうまくならない」、「どんどんミスを重ねてください」と助言しようと思っている。

③ あまり気張らないで、三日坊主になっても続ける

外国語勉強は往々三日坊主になりがちである。とくに自分のような怠け者にとってはなかなか勉強が続けられないが、それでもあきらめないで続けることにしている。ヒアリングではすぐ寝てしまうが、繰り返し聴く（聞く？）ようにしている。外国語日記も、毎日書けなくとも、週一回でも月一回になってもよいから続けることにしている。

第2部 読み、書き、聴き、話す力の各論

人により、得手、不得手があり、また、おかれた環境も異なるので、それぞれにあった外国語勉強法が求められる。第2部では、還暦を過ぎてゆっくりやっていくほかない自分の外国語の再勉強をあえて記述することとした。

1、読む力

ドイツ語の大家、関口^{つぎお}存男は、ドストエフスキーの『罪と罰』（7つ星か8つ星のレクラム文庫で千頁近くある）を最初のページから辞書を引き引きひたすら読み続け、2年かかり数百頁を読んだところで、ようやく分かり出したという。難解な原書を読了するには、十分な読書時間と、高い読書能力が必要である。そういう難行をこなせる大家や読書人は、ある意味で特殊な人たちである。自分は、大した読書もできず、低い山々の登攀にとどまったが、それでも読書から学んだことは少なくない。もっとも、読書に溺れてしまう危険もあるので、その時は思い切って本を捨てて街に出ることをお勧めする。

① 外国語新聞の読み方

教材としては、外国語新聞のほうが原書の本を読むよりはるかに楽である。最初のころは、記事の見出しを見て、分からない単語をさっとチェックする程度であったが、少しずつ、興味のもてそうな記事を部分的に読むようになり、さらには、記事全文に目を通すようにもなっている。しかし、外国語新聞を毎日丁寧に読むのは、かなり大変で、さぼってしまう日も少なくない。そのため、最近試みているのは、*The New York Times* の社説を音読するか、受験勉強式にどんどん線を引きながら、分からないことを気にせず読むやり方である（邦字紙の社説と比べ英字紙の社説のほうが学ぶところが多い）。

なお、英字新聞を読む場合、分からない単語は可能な範囲で辞書を引いて調べるようにしている。

② 原書の読み方

関口存男大先生のようにじっくり長編を読むのは、自分には無理であるが、読書の醍醐味は、日本語の本を読むように、いったん読みだしたら止められず引き込まれていくところにあると思っている。したがって、原書を読む場合でも、最初から単語をいちいち辞書を引きながら読むのではなく、知らない単語は一応ノートに書いておき、読了後、まとめて辞書を引くようにしている（時には、音読や、すべての行を鉛筆で線を引きながら読み続けることもあった）。

英語教材では、パール・バックの『大地』(Pearl. S. Buck, *The Good Earth*: Longman Simplified English Series 1963) を音読したとき、途中で何度か涙が出て止まらなかった。また、家内の使っていた教材『千夜一夜物語』(E. Dixon, *Fairy Tales from the Arabian Nights*: J. M. Dent and Sons LTD 1951) も面白く読むことができた。

ドイツ語の小説では、カール・マイのシリーズ（ドイツ版西部開拓シリーズ）の一冊 *Winnetou* などは、知らない単語が多かったものの、それなりに大筋を理解することができた。最近になって、原書で読むのは無理だと諦めていたシュテファン・ツヴァイクの短編小説集 (Stefan Zweig, *Novellen*: Mannese Verlag 2013) に挑戦している。

なお、子ども向けの本より、青少年向けの本の方が外国語勉強の教材には適している。子ども向けの本は、大人にはあまり面白くなく、また、出てくる単語も意外と難しい。

③ 辞書を擦り切れて使えなくなるほど引きまくる

外国語の上達度は、現在使っている辞書を十分使いこなしているか、それとも、あまり使っていないかを見ることで簡単にチェックできる。一冊目の辞書がすり切れて使えなくなり、二冊目の辞書を使っている人は相当な達人である（残念ながら自分の辞書はどれもきれいな状態のままである）。

2、書く力

「書く力」については、学校での作文指導で、言文一致で自由に書けばよいと教わった程度であり、大学のゼミでの論文指導も記憶に残っていない。ドイツの大学で、図書館を利用して百科事典や先行研究の文献にあたる方法を教わり、また、社会人になって仕事として実用文を書いてきただけである。

そんな中で、自分の「書く力」が画期的に改善されたのは、パソコンを使うようになってからであり、パソコンは自分の「書く力」の最高の家庭教師になっている。まず、パソコンで打てば、綺麗な文字となり、書き直しも簡単にできる。また、パソコンの外国語修正機能を使うことによって単語のスペルミスが修正される。ドイツ語の場合、面倒なウムラウト母音への転換操作も修正機能を使えば、ワンタッチで簡単に転換できる。

手紙などもパソコンで楽に書けるようになり、また、何度も失敗を繰り返してきた外国語日記も、今は、毎日10行の外国語日記をパソコンで書くことを日課としている。しかし怠け者の自分は、その日課すらこなせず、日記が週一回になり月一回になることもある。かつ、限られた語彙や初歩的な文章力で書いているので、われながら情けない外国語日記となっている。

3、聴く力

音の世界、音楽に弱い自分は、外国語の音を聞くと拒絶反応が起こり、すぐ寝てしまう。初めて外国語音を聞いたら、誰でも最初はまったく分からない。それが第一段階であり、ある程度勉強した第二段階になると、ほとんど分からないものの、幾つかの単語が分かるようになり、さらに進むと、大筋が分かってくる第三段階になる。この第三段階に短期間で到達できる人がリスニング力の達人である。リスニング力のない自分は、「聞いている」第二段階から「聴けている」第三段階になかなか到達しない。

① パソコンでドイツ語ニュースなどを見る

ドイツ語ニュースは、パソコンで ARD の *Tagesschau* (普通のニュース)、*100 Sekunden* (100秒ニュース)、*Tagesthemen* (時事解説の多いニュース) などを見ることができる。自分は *Tagesthemen* をできるだけ毎日聞くようにしている。この場合、音に慣れることを主眼とし、意味が分からなくても日課として続けるようにしている。なお、電波障害などで動画ニュースを見られない場合は、ARD のニュース解説 (文字版) を読むことにしている。

② CD を何度も聴く

昔はもっぱらカセット・テープを使っていたが、今は CD が主流である。ストーリーの大筋が分かるまで CD を何度も聴きつづけることは、原書を最後まで読みつづけるのと同じような根気のいる作業となる。ウィーンの本屋で薦められた Alissa Walser の *Am Anfang war die Nacht Musik* (Osterwold の CD 6 枚、448 分もの) は、最初は全く分からなかったが、意地になって何度も聞いているうちに、何とか大筋を理解できた。リスニング力がどれだけついたかは分からないが、ある種の達成感を持つことができた。なお、CD は、映画や DVD よりもはるかにリスニング効果があるが、自分はすぐ寝てしまうので、睡眠防止のため、朗読の一文章が終わったところで CD をいったん止め、たとえ正確な発音でなくとも、自分が聞き取った音をオウム返しに発声する練習も試みた (効果はあるが、これもかなりの難行である)。

(参考) カセット・テープのウォークマン時代の話であるが、英語のカセットでは、何度も聞いた Rosamunde Pilcher の *The Shell Seekers* や *Under Gemini* が懐かしい。また、Charlotte Brontë の *Jane Eyre* なども印象に残っている (いずれのカセットも 3 時間もの)。

③ DVD の映画を見ながらのリスニング

町の図書館から借りる DVD でアガサ・クリスティのポアロ探偵やミス・マープルのシリーズを見ている。これらのミステリーが教材として良いのは、何回か見るにより大筋を理解できることである。最初は、英語字幕なしで、次は、英語字幕付きで何度も繰り返し見るようにしている。時折、画面を消して CD のようにして聴くこともあるが、その場合は、寝てしまうことが多い。なお、人名、地名や、宗教、文化などのなじみのない用語は一回聞いただけではなかなか聞き取れない。

余談であるが、ポアロ探偵シリーズに登場する人物の顔を識別することが意外に難しい。昔、外国人が日本人の顔を識別するのが難しいとよく言っていたことを思い出しながら、今は DVD のポアロ・シリーズでその逆体験をしている。

④ 映画館で映画を見る

リスニングの勉強としては、断然 CD がよいが、それでも映画の楽しみは捨てがたい。語学勉強に向く映画は、西部劇などのアクション物より、言葉のやり取りの多い法廷もの（リーガル・サスペンス）である（すぐ思い浮かぶ名画は、『12人の怒れる男』（1957年米映画）である）。

高校生ぐらいのとき、西部劇を見て覚えた英語は、カウボーイが大声で叫んだ stampede（牛の暴走）という単語だけであった。最近見た『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』（*Ex Libris—The New York Public Library*、2017年アメリカ映画）は3時間25分のドキュメンタリーで、図書館内部の幹部会の討議場面が何回か出て来た。音響効果がよかったせいか、議論の英語に迫力があり、その意味ではリスニングのよい勉強になった。

⑤ 子音の多い外国語は大きな声を出して話す

ここは「聴く力」の話ではあるが、音の世界の話なので、発声の仕方につい

で少し触れておきたい。一番大切なことは、腹からできるだけ大きな声をだすことである。原則、子音に母音がついてくる日本語は、小さな声でも相手に聞こえるが、子音のみを発音することが多い欧米系の言語は、大きな声を出さないと相手に伝わらない。

なお、日本語化したカタカナ英語は、子音のあとに母音が入ってくるので、原語の読み方に変えないと通じないし、略語のカタカナ英語（たとえば、インフレーションをインフレという）も、要注意である。

4、話す力

「話す力」と言っても、挨拶のスピーチ、演説、ディベート、身近な人たちの雑談、家庭内の会話などいろいろな場面があるが、基本的には特定、不特定の相手に話しをすることであり、聞き手が自分の話しにどこまで共感をもってもらえるかが成否の鍵を握る。「話す力」の中では、日本人に馴染みのないディベート技術の習得が一番大変である。

(1) ディベート

「和の文化」の日本では、謙譲と思いやりが基本であり、論理攻めはしないというのが基本ルールであり、言葉の激しいやり取りや、ぎすぎすした議論は好まれない。このルールを破ると、時には相手方との感情的対立にまで発展し、人間関係が元に戻らなくなってしまう。他方、欧米の世界ではディベートの論理攻めが基本となっており、学校教育の段階から、ものごとを簡潔に説明し、また、自分の考えを明確に述べる訓練をしっかり受けている。日本の宮本武蔵は、グローバル・スタンダードとなっている欧米流のディベート技術をものにしていく必要がある。

なお、これまで、グローバル社会のディベートの言論戦では、議論で相手を論破することが第一だと考えていたが、本稿を書きながら、感情的な議論で相手を傷つけないようにし、冷静な議論を通じて、双方が合意できる落としどころ

を探っていくことが一番大切であることに気づき、他人との議論を通じて、自分の考えをより確かなものにしていくことが本当のディベート道でないかと思うようになった。狩野みきが『「自分で考える力」の授業』の中で、ディベートの第一の心得として「この世に絶対的に正しい意見など、ないと心得る」ことを強調していることに大いに共感している。

① しっかりした自分の意見を持つ

日本人でしっかりした意見を発言できる人は少ないといわれているが、それは、日本の社会では、自分の強い意見がなくとも特段の支障なくやっていけるからで、逆に余り自己主張が強すぎると周りから排斥されてしまう。

しっかりした自分の意見を持つには、日頃から、自分でよく考える、考え抜くことを習慣化することであり、また、自分の意見を相手に分かるように明確に語れるようにする言語化の訓練が大切である。

一つの方法は、自分の考えをまず紙に書いて考えを整理してみることである。また、自分の頭の中で仮想ディベート、討論の練習をすることも効果がある。さらに、欧米諸国で行われている **assertive training** を含む各種言語技術コースを日本の学校教育や、企業や官庁の実務研修に取り入れることは、グローバル社会の frontline に立つ人々のディベート力強化に大いに役立つであろう。

② グローバル社会の言論戦のルール

グローバル社会のディベートでは、自分の意見がないと、言論戦の土俵にはあがれない。そこでは「沈黙は金なり」は通用せず、言葉で表現できないときや、切り返しができないときは負けと判定され、勝敗が決まってしまう。したがって、土俵から決して降りることのないように、反論のための二の矢、三の矢を十分準備して臨まなければならない。

ところで、日韓間の慰安婦問題論争を扱ったドキュメンタリー映画『主戦場』(*The Main Battleground of the Comfort Women Issues*, 2018年米映画、

日系アメリカ人監督ミキ・デザキ)を見た印象であるが、一つは、日韓双方とも感情的な議論になって言論戦のルールから完全に逸脱してしまっていること、もう一つは、論争では日本側が韓国側に押され気味に見えたことである。

(2) スピーチ (Public Speaking)

外山滋比古は、『聴覚思考』の中で、「日本には文字のことば、目のことばを、話し、聴く耳のことばよりありがたがる風土があった」、また、「古くから大勢の前でものを言う習慣がなかった」と指摘しているが、話す文化は、日本社会ではまだまだ大切にされていない。

在外勤務時代、スピーチ文化の伝統の中で育った数多くの達人に出会った。即席スピーチの上手な人や、難しいテーマでも原稿なしで講演する人が少なくなかった。ドイツなどは短いスピーチよりも長いスピーチのほうが評価されるが、その長いスピーチを原稿なしで話す政治家にも感心した。また、スポーツ選手がインタビューなどで、単文の会話調でなく、論理的に話していたのも驚きであった。

① 短い挨拶なら原稿を読まずにスピーチをする

日本では、原稿を読み上げる挨拶は一般的な慣行として認められているが、スピーチ文化の発達している国々では評価されない。どうしても原稿を読むなら、相手に気持ち伝わるような読み方を工夫すべきである。もっとも、晩餐会や米大統領の就任演説などの公的スピーチは原稿を読むのが通例である。

② 上手な人に原稿を書いてもらうのもよい

アメリカ大統領のスピーチは専任のライターが書く。映画『LBJ ケネディの意志を継いだ男』(2016年米映画)では、暗殺されたケネディ大統領の後を継いだジョンソン大統領が、ケネディ大統領の分身といわれたセオドア・C・ソレンセンに強引に頼み込んでライターを引き受けてもらう場面があった。

③ 事前の練習も重要

映画『サラエヴォの銃声』（2016年ベルリン映画祭受賞、仏・ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ製作）を見たとき、映画のストーリーそのものよりも、ある政治家がホテルで何時間にもわたって延々と演説の練習をしている場面が一番印象に残った。スピーチ文化の発達した社会では、スピーカーは事前のリハーサルを欠かさない。

(3) 社交に強くなる

日本やビルマ/ミャンマーでは、相手の気持ちを察し合うハート・ツー・ハート・コミュニケーションが一般的である。他方、グローバル社会でのコミュニケーションは、言葉でのやりとりが基本であり、言葉で明確に意思表示していく必要がある。私的な会話であっても、いろんな人と相席する食事会などでは、近距離コミュニケーションではなく、遠距離コミュニケーションとなる。たとえば、映画が話題になれば、まず3つのテーマを瞬時に考え、「自分は3つの印象を持った、第一に、…。第二に、…。第三に、…。」というように説明するのが遠距離コミュニケーションである。これに対し、「映画を見てどうだった」と友達に聞かれて、「よかったよ」と応じてさらに「どこが」と進んでいくのが近距離コミュニケーションである。

あとがき

自分は欧州での在外勤務が多かったが、アジア勤務を二度体験している。あとがきというより、余談になるが、アジア勤務に係わる思い出を書いて、あとがきの代わりとさせていただきたい。

最初のアジア勤務は、バングラデシュ大使館で、このとき読んだジョージ・オーウェルの『ビルマの日々』（音羽書房 1980年）は、それまで全く関心なかった文学の世界に自分の目を開かせてくれた。その後、オーウェルが気に

なり、原書を含め何冊か読み、どこまで理解できたかは別として、『鯨の腹の中でいくつかのエッセイ集』(*Inside the Whale and Other Essays*: Penguin Books 1957) の中の「象を撃つ」(“Shooting an Elephant”) が印象に残っている。

二度目のアジア勤務は、ビルマ/ミャンマー大使館であったが、マ・ラーキンの『ミャンマーという国への旅』(晶文社、2005年) を読んで、世界各国に熱心なオーウェル・ファンがいることを知った。また、ビルマの人たちと接して気がついたのは、独特のハート・ツー・ハート・コミュニケーションである。一番苦労したのは、贈り物をする時である。ビルマの人たちは何が欲しいかということを具体的に言ってくれず、こちらで適当に贈り物を選ぶしかなかった。ビルマの人たちは、親しい間柄だと、当然相手は自分の欲するものを知ってくれているので、自分の方から差し出がましく口に出すべきではないと考えている。もどかしい思いをすると同時に、奥ゆかしさの残るやりとりにはっとする気持ちにもなった。

(2019年9月15日記)

本小論作成に当たり、外務省 OB の黒川剛元オーストリア大使、多賀敏行元チュニジア大使(現大阪学院大学教授)、大阪学院大学外国部学部川本裕未教授、同大学神谷善弘准教授より貴重なご助言をいただいたことに深謝する。とくに、黒川元大使、川本教授より内容及び編集について詳細なコメントをいただいたことに謝意を表したい。

参考文献

(参考1)

池内紀『ことばの哲学 関口存男のこと』青土社 2010年

- 狩野みき『「自分で考える力」の授業』日本実業出版社 2013年
 木下是雄『理科系の作文技術』中公新書 1981年
 木下是雄『日本人の言語環境を考える』木下是雄集3、昌文社 1996年
 松本道弘『英語アレルギーの治し方』KK ベストセラーズ 1998年
 三森ゆりか『外国語を身につけるための日本語レッスン』白水社 2003年
 外山滋比古『聴覚思考』中央公論新社 2014年
 柳父章『日本語をどう書くか』法政大学出版局 2003年

（参考2）エヴェレスト遭難記

- ブクレーフ, アナトリ: デウォルト, G. ウェストン『デス・ゾーン8848M、
 エヴェレスト大量遭難の真実』角川書店 1988年
 クラカワー, ジョン『空へ エヴェレストの悲劇はなぜ起きたか』文藝春秋
 1997年
 ウェザーズ, ベック『死者として残されて』光文社 2001年

A Proposal on Self-Teaching Methods for Learning Foreign Languages

Kazuo Matsumoto

This paper describes how the author is learning German and English. After he saw the film *Everest*, he got deeply interested in the tragic Mt. Everest disaster in 1996. He read further several books about the disaster, which made him feel the necessity of a lot more knowledge and skills of foreign languages as well as the importance of careful and elaborate preparations like those that expert climbers make before climbing to the summit. Eventually, he got an inspiration to change his methods of learning foreign languages in the following ways:

- ①Embark on the ocean of German and English World by being immersed in these languages as much as possible.
- ②Rely on the remaining memories about German and English in the brain rather than forcibly make efforts to memorize new German and English words and phrases.
- ③Don't become depressed but take account of the process how the children acquire their mother tongue.

What the above mentioned three points have in common is investing ample time in study and tackling with German and English in the relaxed manner.

In the second section the author explains his way of developing each of the four skills of language learning, that is, reading, writing, listening and speaking. Several examples are shown in the following way:

He tries to read a book to the end, without consulting with a dictionary. After completing the reading, he confirms the unknown words by consulting with a dictionary. He writes a diary in German and English by the help of spell checking and proofreading functions of the personal computer. It is recommended to listen to German and English again and again by watching newscasts on the computer, listening to CDs repeatedly, etc. The debate is not an easy task for many Japanese. He believes that the language arts education and practical training of debating are crucial for people who are engaged in the global communication.

抄訳 テネシー・ウィリアムズ作 『カミノ・リアル』(16場)

平 松 良 康

ここに訳出したのは、A New Directions Book が1971年に刊行した *The Theatre of Tennessee Williams Volume II* 所載 “Camino Real” の序幕前半と第16場である。この二幕を選んだのは、ドン・キホーテやサンチョ・パンサが登場するのが全17場の中で序幕と終幕のみだからである。幕開き早々、サンチョは古い城壁都市カミノ・リアルの悪名高い独裁政治に恐れをなして故郷に逃げ帰り、一人市内に辿り着いたキホーテも終幕まで眠り続ける。芝居の大部分はキホーテの見る夢の様に、愛や死や絶望や希望に関する不可思議な象徴劇として、一連の山車行列の如く進行する。

カミノ・リアルでは、広場の涸れた噴水を中央にして高級ホテルと貧民街とが好対照をなし、ホテル経営者のガットマン（腸を抜く様に一切切を収奪する支配者）が秘密警察よろしき街路清掃員を操り、暴行・殺害を恣にして権勢を誇る。逗留する者は夢破れ傷ついた様々な時代の敗残者であり、誰もそこから抜け出す事が出来ない。カサノヴァや詩人のバイロンも登場し、往時の栄光に縋る富豪や有閑夫人、社交界の花形の零落が残酷に露呈し、儚く人生の舞台から消去されて行く。

主人公のアメリカ人キルロイはボクシングの元王者だが、心臓肥大の重症の為に天職の拳闘も夫婦の愛の交歓も禁じられ、「人生には生きる目的、或は、理由が全くない」（臼井、101）と感じ、故郷を捨ててこの地に流れて来る。キルロイは財布を掏られ、祭りの道化の役回りを強要され嘲弄を受けるが、ジブシーの娘エスメラルダに一縷の愛の望みを掛け、けれども不条理な状況に弄ば

れる。捕まり殺され解剖された上、純金の心臓を奪取されるすんでの所で、幽霊と化しながら必死にこれを取り戻す。然し、大切なその心臓をも仮初めの愛の故になげうち、彼は全てを無くする事になるのだが、目覚めたキホーテと共に不死鳥の如く、荒野に旅立つ決意を固める。

終幕の決め台詞「高山のスマレ、岩石を打ち砕けり！」は、夢やロマンスが決して実現せぬと知りつつ、それでも絶望に屈しない作者の悲願の叫びである。臼井氏はその主題を「ヨブ的テーマ、サタンのテーマ」(89)に分けて聖書と実存主義の哲学との考察に基づき、「ヨブの末裔は自らが置かれ」た「絶望的状态を」「認め、己に課された条件そのものに対する」「反逆に立ち上がる。」(134)と、核心を論じた。

換言すると、この芝居はキリスト教の最も重要な徳、信・望・愛に関するアメリカ版ヨブの反問の表白である。悪しか存在せぬ様に見える場所に如何に善を見出し、絶望して当然の場合に如何に希望を抱き続け、愛の救済の至難にも拘らず如何にそれを信じ得るか。一見道化の如きキホーテの不撓不屈の西洋精神を幻想的かつ猥雑に描き出した、これはウィリアムズ一流の信仰の美しい祈りなのである。現実家が過酷な現実の前に全く無力であり、理想に邁進出来るのが虚構の老爺と幽霊とのみである、この結末は作者の峻厳な現実認識を反映して居る。

『カミノ・リアル』初演の1953年は、実に興味深い年だ。アイゼンハワーが大統領になり、ダレス国務長官が対ソ連「巻き返し政策」を打ち出す。スターリンが亡くなりマレンコフが後任となり、東ドイツでは反ソ連デモ・暴動が発生し激化する。ソ連が水爆実験に成功し、フルシチョフが権力を掌握する。アメリカ国内ではスパイに対する「マッカーシズム」の赤狩りが起こる。この戯曲冒頭のダンテ地獄篇の引用句、「人生の道の半ばで 正道を踏み」外し「目をさました時は暗い森の中に」居た(平川訳、8)と、その様な不安と恐れを周章者なら痛感させられた時代かも知れない。何しろハムレットが嘆くこの世の「関節のはづれた世界」、ハート・クレインの「毀れた世界」(臼井、133)、

まさに地獄の口に立つかの様な暗い世相である。当然、この政治状況の閉塞感
は、独裁者ガットマンや非道な街路清掃員の創作に影響を及ぼしたに相違ない。

けれども、より深く内省的で本質に拘泥するテネシー・ウィリアムズは、神
に「有罪判決を受けた罪人であること」を常に自覚して居た(市川、141)。
「いつも挫折感、虚脱感、喪失感、価値の不明にさいなまれて」居たにせよ、
同時に「あらまほしき姿を自ら」徹底的に追求した「ロマンティック・マイン
ドの作家」(市川、173)である事も忘れてはならない。臼井氏の評言を借りれ
ば、「芸術の社会的道徳的使命」を信じたウィリアムズの作品に於ては、「反俗
思想と形而上学的反抗が不可分に結びついて」(109)居る。即ち、ウィリアム
ズの創作の鍵は、外界のどれほど不穏な政治情勢にも慌てず騒がず、内面の最
悪の自己憐憫にも決して溺れず、不幸のどん底にも恐るべき死にも、ユーモア
の感覚を武器にして努めて平静に臨み、そこから反転して最高の美と道義の理
想に近付かんと奮起する、すぐれて求道的な生の悪戦苦闘に他ならない。

彼の希望の象徴的人格たるドン・キホーテは、西洋精神の危殆に瀕する時、
幾度も復活を果す。かかる不死鳥の精神の足跡を看過してはなるまい。十二年
後、ミュージカル『ラ・マンチャの男』が上演せられ、特に理想に邁進する孤
高の魂の賛歌とも称すべき「見果てぬ夢」(実現不可能な夢)の曲は、未だに
アメリカ人を魅了して已まない。そのまた十七年後、G・グリーンはスペイン
を舞台にして、現代版の遍歴譚『キホーテ神父』を上梓した。この芝居と同じ
く独裁政治下に於いて、神への反問は深刻な懐疑の弁証法を展開し、やはり同
様にユーモアを武器にして、絶望的な苦闘が最後まで続くのである。

『カミノ・リアル』には既訳が二つある。中田耕治訳の10場は、この芝居の
原案だが別物であり、ドン・キホーテの出番が更に少なく、人物描写も貧弱
だ。16場の大庭みな子訳は、訳了後までその存在を知らず未見だが、全集所
載のエッセイから訳者の動機と意図が読み取れる。まだ無名の訳者の、アラス
カ滞在の鬱屈、作家たる強固な自負、自由の解放感への共感と憧れが語られ
る。私の印象では、訳者が作品を自分に引き寄せ過ぎて居ると感じた。「もう

一人の自分」(273) との邂逅を喜び、この芝居を「ほとんど自己に重ねて」「自分自身の言葉」(274) に置換したと告白するのである。「この作品の翻訳は全く私自身の青春の手がかり」(274) だと述べるのだから、作家大庭みな子の原点としての意義はある。

だが、既述の通り、ドン・キホーテに着目したこの抄訳の意図は、欧米人が限りなく絶望に接近した際に示す、彼等の宗教的な伝統に根差した、神への執拗な反問の雄々しさと、その先にある徹底的な自己放擲の潔さに瞠目する事にある。ドン・キホーテの生き方に自己実現を見るのと、自己放擲を認めるのでは、関心の方向が全く逆なのである。

【引用・参考文献】

- アリギエーリ、ダンテ『神曲 地獄篇』平川祐弘訳、(河出文庫、2009年)。
市川節子『ぼくがイグアナだったこと』南雲堂、2001年。
ウィリアムズ、テネシー「カミノ・レアル」『テネシー・ウィリアムズ 一幕劇集』中田耕治訳、(早川書房、1980年)。
臼井善隆『文学と政治・基督教』近代文藝社、2014年。
大庭みな子『「カミノ・レアル」—テネシー・ウィリアムズ』『大庭みな子全集 第十巻』講談社、1991年、272-276頁。

テネシー・ウィリアムズ 『カミノ・リアル』(16場)

(『王の道』)

序幕

幕が上がると、殆ど照明の無い舞台上に、風のやかましい音が聞こえ、どんどんと打ち付ける寄せ波か遠くの砲撃の音の様な微かな反響が伴奏を奏でる。セットの背景をなす古代城壁と、その壁の上に見える山々の周辺との遙か上方には、白い発光のゆらめきがあり、夜明けが、あたかも網に捕まり飛び立つ為

にもがいて居る白い鳥であるかの様である。

この光の中に広場が断続的に見える。それは熱帯の港町のもので、混乱させる様な、けれどもともかく調和の取れた類似点があるのは、広く点在するタンジール、ハバナ、ベラクルス、カサブランカ、上海、ニューオーリンズの様な港湾都市である。

舞台上手には、その通りの豪華な区画があり、シエタ・マレス・ホテルの正面と低いテラス席が見え、テラスの上には幾つかガラス天板の白いスチール・テーブルとイスが並ぶ。下の階に大きな出窓が一つあり、窓の中には一組の上品なマネキンが見え、一人は腰かけ、もう一人は後に立ち、彩色された笑顔で外の広場の方を見て居る。上の階には小さなバルコニーがあり、その後方、城壁に向いた大きな窓に、シルク地に描かれた不死鳥のカーテンが掛けてある。この不死鳥は劇中時々、柔らかに照らされた方がよい、復活こそがまさにその意味の一つなのだから。

このホテルの反対側にはスラム街が広がり、ジブシーのけばけばしい小店、質入れされた様々な品を並べた窓のある高利貸しの事務所、それにリッツ・メン・オンリーがある。これは安ホテルか木賃宿と呼べる建物で、その一階玄関の上には実用窓が見え、入口からは時々、浮浪者が現れて、適切な或は対位法の歌の題名を伝令する。

舞台奥は、古代の城壁に登る大階段になり、一種のアーチ道に通じ、外の「テラ・インコグニータ」へと続いて行く。劇中で語られる所の、城壁都市と雪を冠した山々の遙かな周辺との間に広がる荒野である。

舞台前面の上手にも下手にも、一対のアーチ門があるが、袋小路の通りに入

るばかりである。

幕が上がると直後に、劇場の中央通路に一筋の青い照明が当てられる。そして、この光が建物の後方から前に進んで来る中を、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ登場。老いた「トビネズミ」の様な格好である。彼は通路に入るや、哽れた老人の声で「オーラ！」と叫ぶ。それはまだ生气に満ち溢れて居るが、これに応じたもう一人の声は苛立ち、疲れ果てて居る。彼の従者、サンチョ・パンサである。肉体的なものに過ぎない疲労からよるめきながらも老騎士は通路を進み、サンチョが2、3メートル後に続く。中世の盾から軍用食器入れや魔法瓶に至るまで、大量の備品を持たされて居る。主従の間で、大声の会話が交される。

キホーテ [風にもかき消されず、殆ど老人らしい声でがなり立てて]：
青は遠き道のりの色！

サンチョ [彼の後でうんざりして]：
はい、道のりに青ざめて。

キホーテ：青は気高さの色でもある。

サンチョ：はい、気高さは青くさい。

キホーテ：青は遥かな道のりと気高さの色だ、だからこそ老いた騎士は身辺のどこかに、常に青いリボンの切れ端を付けるべきなのだ……

[彼は疲労困憊してふらつき、通路席の客の肘を突く。謝罪の言葉をぶつぶつ呟く。]

サンチョ：はい、青いリボンの切れ端。

キホーテ：色あせた青いリボンの切れ端、何であれ甲冑の名残りの物に隠されたり、槍の先端に付けられたり、騎士の一不屈の槍だ！それこそ老

騎士に想起させるのに役に立つ、遥かに来し方と遥けき行く末との道のりを・・・

[錆びた鎧の備品を幾つか通路に落として、サンチョは排泄物に相当するスペイン語を呟く。]

[キホーテは今や前舞台への踏み段の下に到達する。彼はそこで立ち止まる、あたかも夢への入場・夢からの退場に当て所なくぶらついて居るかの様に。サンチョが彼の後でガチャガチャ鳴らしながら、引張り上げる。]

[ガットマン氏が、尊大な肥満体に亜麻のスーツとソラの髓で編んだ日除け帽を着用して、シエタ・マレスのバルコニーにぼんやりと現れる。手首には白いオウムを乗せて居る。その鳥が荒々しく鳴き立てる。]

ガットマン：シーツ、オーロラや。

キホーテ：そして又、老騎士に想起せしめるのは、その暮したる緑の故郷、心の青年時代たりし田舎よ、この様な誓約を高吟するより前の、絶対の真理とか！

サンチョ [息を切らして]：一真理。

キホーテ：勇氣！

サンチョ：一勇氣。

キホーテ [槍を掲げて]：本分！

サンチョ：本分・・・

キホーテ：—それが大した老修道僧の無意味なぶつくさになり果てた、夕食の冷めた羊肉に背中を丸めて執着する有様！

[ガットマンが広場の二人の警備兵に警戒させる。彼等は赤いランタンを持ち横断して、前舞台の両側に着く。そこで二人は白と黒の縞模様の防護遮断機を下げる、まるでその前舞台が前線を示して居るかの様だ。その一人がピストルのつり革に手を置き、踏み段の上の二人連れに歩み寄る。]

警備兵： ヴィエン アキ。（ここに来い。）

[サンチョは尻込みするが、キホーテは昂然と防護遮断機にすたすた近付く。この警備兵は彼の陰気な、甚だ生真面目な赤ら顔に懷中電灯を向け、武器を隠して居ないか、投げやりに「身体検査」を実施し、錆びた古い小刀を調べ、小馬鹿にした様にそれを投げ捨てる。]

警備兵： スス パピレス！ スス ドキュメントス！（お前達の書類は！文書は！）

[キホーテは帽子の裏地から何かボロボロの古い紙きれを不器用に取り出して見せる。]

ガットマン： 誰だ？

警備兵： キホーテと名乗る年寄りの砂漠ネズミです。

ガットマン： おお！—お待ちして居た！—通せ。

[警備兵達は遮断機を上げて、一人がテラスの上で喫煙する為に腰を下ろす。サンチョはまだ後ずさりする。前舞台の上と通路への踏み段との間で、口論が生じる。]

キホーテ：進め！

サンチョ：おお、嫌です。ここの事なら承知してる。[皺だらけの羊皮紙を取り出す。] 地図にありまさあ。ほら、ここに書いてある、「歩み続ければ、城壁の町の広場に到る。カミノ・リアル（王の道）の終点にして起点なり。そこにて立ち止まるべし。」その続きは、「旅人よ、引き返せ、この地にては人間らしさの泉の干上がりたるが故なり——」

キホーテ [その地図をサンチョから掴み取り、残りの文字を読む。]：一かの国に一羽の鳥も見ず、野鳥は悉く人に馴らされ、飼育せらるるのみ——[彼は地図を鼻先に近付ける。] 一籠の中にて！

サンチョ [しっこくせがんで]：いざラ・マンチャに帰らん、ね、ね？

キホーテ：進め！

サンチョ：今が引き時ですよ！

キホーテ：引き時など断じてない！

サンチョ：俺あラ・マンチャに戻ります！ [彼は騎士の装備をオーケストラ・ピットにまとめて放り出す。]

キホーテ：拙者を見捨ててか？

サンチョ [通路の後方へ大急ぎで]：見捨ててでも一緒でも、疲れ知らずの、疲れさせる旦那様よ！

キホーテ [懇願する様に]：サーン チョー！

サンチョ [通路の端近くで]：ラ・マーン チャー・・・に俺あ戻ります。

[通路の青い光が薄れて行くにつれ、サンチョは姿を消す。警備兵は煙草に火をつけ、広場からぶらぶら出て行く。風がうめき、その大昔の騎士が侘しい風情で広場に入場すると、ガットマンは静かに嘲笑する。]

キホーテ [広場を見渡し]：孤独だ・・・

[驚いた事には、その言葉が、町の大階段の下や城壁に面して体を寄せて群がる殆ど目につかぬ人物達により、優しく木霊する。キホーテは自分の槍に寄り掛かり、苦笑しながら見守る。]

一見た目の孤独の数だけ孤独な者が居るのに、手助け無用の平氣の平左が孤独であるなどとは、許し難い身勝手だな。

[彼は埃まみれの毛布をよくはたく。影の様にぼんやりした沢山の腕が彼の方に伸びて来て、多くの声が囁く。]

声： 眠れ。眠れ。眠れ。

キホーテ [毛布を準備しながら]：ああ、左様、しばらく寝るとしよう、この町の壁に対面して少しばかり眠り、夢でも見るとするか・・・

[マンドリンかギターが「フランスのナイチンゲール」の曲を演奏する。]

一我が夢は奇跡の劇の移動舞台、仮面劇の行列となり、昔の意義が想起せられ、恐らく新たな意義が見出されよう、そしてこの眠りから、この心かき乱す仮装行列の夢から覚めた時、その影の中から一人を選び、サンチョの代りに拙者の供をさせるとしよう・・・

[指の間で手鼻をかみ、シャツのすそで拭き取る。]

一何となれば、新しい連れは古い連れほど親しくないものだが、結

局は同じ事—顔かたちがほんの少々異なるばかり、それが進歩向上なのかどうか解らぬが、ともあれ昔の連れのままなのだ、それに拙者が一人で平気なのに孤独だなどとは、我儘に過ぎよう・・・

[彼は大階段の下にある窪みへの勾配で蹠く。その窪みにホームレスの大半が開いた小店の日除けの下、群がり身を縮めて居る。]

[白いオウムがやかましく鳴く。]

ガットマン：シート、オーロラ。

キホーテ：明日の丁度同じ時刻、我らはマドルガーダと呼んで居る、アルバなる単語を除いて全ての言葉の中で最も魅力的な言葉なのだ、その言葉には夜明けの意味もある—

—左様、明日の夜明けに、拙者は新たな連れを供にしてここから出立する積りだ、それにこの古びた青いリボンの切れ端が、道のりを拙者の心に刻ませる、来し方と今後の行く末との、して又、拙者の心に留めさせるのだ—

[オウムが激しく鳴く。]

[キホーテは騒々しい鳴き声に同意するかの様に頷き、大階段の下で彼の毛布の中に体を包み込む。]

ガットマン [オウムのトサカを撫でながら]：おとなしくしろ、オーロラ。うむ、朝が明けたな、オーロラ。

[夜明けが広場を銀色に染め、徐々に金色に変化してゆく。商店の

白い日除けの下で、物売りが起き上がる。ジブシーの小店が開く。ガットマンが話して居る時に、中年も後半の背の高い、上品な名士（ジャック・カサノヴァ）がポケットから銀の嗅ぎ煙草入れを取り出しながら、シエタ・マレスから高利貸し店の方へ横切る。（恐らくドン・キホーテを除いて）この芝居に登場する伝説の人物達は皆、一般に「現代的」だが、実際に関係する時代の痕跡をいささか留めて居る。カサノヴァの場合、彼のステッキと嗅ぎ煙草入れ、事によると錦織りのベストが、この歴史に基づく暗示を示すのに十分かも知れない。彼はタカのような頭を持ち、大抵一種の不安な驕りを見せる。着実に激しくなる圧迫の下で保たれて居る驕りである。]

一朝になり、朝が過ぎます。午後です、ハハハ。さて、階下に降りてあの老いた放浪者の夢の始まりを告知しなければいけません・・・

（以下省略）

第16場

キルロイ [前に飛び出し]：

それは僕のものだ、この野郎！

[彼は医学の教官からその金色の球体を奪取する。検死は台の上の照明が徐々に暗くなるにつれて、何事も無いかの如くに進行する。だが、キルロイには、幽霊としての逃走劇が始まる。第6場の終りに生じた追跡の幻想的な再上演である。ガットマンがバルコニーから叫ぶ。]

ガットマン：止まれ、泥棒！止まれ、亡骸！その金の心臓は国家の財産だぞ！

奴を逮捕しろ、純金の心の強盗犯を！

[キルロイは舞台袖を疾走し、劇場通路に降りる。警報の悲しい音が聞こえる。その場の雰囲気は呼び声や笛の合図、エンジンの轟音やブレーキの甲高い音、ピストルの発砲音や雷鳴の様に響く足音で満ち溢れる。客席の薄暗さはサーチライトの数条の光線に切り裂かれるが、追跡者はどこにも見当たらない。]

キルロイ [息を切らして通路を走りながら]：

これは僕の心臓だ！どここの国の物でもない、アメリカの物ですらない。出口はどこだ。長距離バスの停留所はどこに？誰にも、僕の心臓を博物館のビン詰め展示にして入場料を取らせたりはさせない、腐敗した警察の支援なんかに協力するものか。あいつらどこに居やがる。どちらに進んで居るか、いや、どちらから来るのか？ねえ、誰か、僕を助けて、ここから出して下さい。どの方向に僕は、どうしよう、どちらに、僕は行くぞ、行くぞ、行くぞ、行くぞ！

[漸く彼はバルコニーの中に辿り着く。]

畜生、迷子だ！どこに居るのか、解りやしない。ぐるぐる堂々巡りだ、混乱して居る。訳が解らないや、何が、起きたのか、まるで、夢みたい。まさに悪夢だ、…… マリア様、ああ、マリア様、マリア様！

[第2場で跳び上がる足場にした箱の中に這入る。]

[明るい一筋の光が彼の上に注ぐ。彼はその光を見上げて泣き叫

ぶ。]

マリア様、キリスト教徒が御保護によりすがり、御助けを求めます、マリア様！悪い夢みたいだ・・・

[エスメラルダが子供染みた寝巻を着て、ジプシーの店の屋根の上に、薄織物のテントの張られたベッドの傍らに現れる。彼女の母親も甘く囁きながら、鎮静剤入りの飲み物を持ち登場。]

ジプシー：おねんね、おねんねおし、いい娘だね。お休みの時間よ、南も北も、東も西もね。

キルロイ [優しく]：
いやはや全く、夢、みたいだ・・・

[喘いで彼は、箱の棚から身を乗り出す。自分の心臓をアメリカンフットボールの様に抱きながら、エスメラルダを見つめる。]

ジプシー：大麦の栄養ドリンクをお飲み、可愛い子や、そしたら眠りの精が忍び足で訪ねて来るさ、いろんな夢で一杯の袋を下げて。

エスメラルダ：お母さん、私は選ばれた英雄の夢が見たい。

ジプシー：どいつだい、これから来る男か、これまでに済んだ男か。

エスメラルダ：唯一の人、キルロイよ！彼は誠実なもの。

キルロイ：その通り。かつては、しばらくの間は。

ジプシー：どうしてキルロイが誠実だと解るかね？

エスメラルダ：あの人自身の言葉から。

キルロイ：真実だ、かつては本当に。

ジプシー：それをあいつは何時？

エスメラルダ：私のベールを上げた時に。

ジブシー：ねんねだね、男どもはお前のベールを上げる時には、いつでも誠実なんだよ。自然な条件反射の一つで、何か意味のある事では全然ない。

キルロイ [傍白]：ジブシーの御袋は、何てひねくれた嫌な婆あだ！

ジブシー：それにお前の為のお祭りは、他にもこれからまだ沢山あるさ、小さなお人形さん、他にも沢山の選ばれた英雄がお前の小さなベールを上げる事になる、母さんとばあやが部屋を空けて居るすきに。

エスメラルダ：嫌だ、お母さん、絶対に、本気よ。

キルロイ：あの娘は本気だ、僕は信じる。

ジブシー：大麦の栄養剤を早く飲み干して、床に就く時のお祈りをおし。

[エスメラルダはその飲み物をすすり、母にコップを手渡す。]

キルロイ [彼の声は途切れがちになり]：

僕には一人の真実の女性が居た、その人の所へは戻れないけれど。
でも、もう一人の女性を今見つけた。

[箱から舞台の上に跳び下りる。]

エスメラルダ [跪いて]：

今、私は眠りにつき、主よ、私の魂をみ手に委ねます。目覚める前に臨終の苦しみがありますなら、主よ、私の魂をみ元にお召し下さい。

ジブシー：神の祝福が母さんの上にあります様に。

エスメラルダ：そして水晶と紅茶の茶葉の上にあります様に。

キルロイ：あのう・・・

エスメラルダ：今のは？

ジブシー：広場の雄猫だよ。

エスメラルダ：今夜、広場で寝床の無い全ての猫にも、神様の祝福があります様に。

キルロイ：アーメン！

[人影のない広場で、彼は跪く。]

エスメラルダ：神様の祝福が全ての人の上に、通りで自分の心呼び売りする詐欺師、ペテン師、強引な露天商にも、再犯の恐れのある前科者や、愛の過ちを犯した高級娼婦や、嫉妬の一番長い角で飾られた恋人達のうちでも最も立派な人や、心に秘めた緑の田舎から遠くまで放浪したけれど、帰り道を見つける事が或は出来るかも知れないし、どうしても出来ないかも知れない詩人にも、祝福があります様に、今夜天から微笑を浮かべて、最後の伊達男の紳士や、さびた甲冑と汚れた白い翼を持つ人々を御覧になり、一致とほとんど哀れみと呼べる様な慰めを以て、あの消えゆく伝説的人物たち、曖昧に憶えられた歌の様にこの広場に現れては消え去る人々を、顧みてください、ああ、いつの日かどこかで、再び栄光なる言葉の意味する所が実在します様に！

キホーテ [嘎れた大声を出し、ノミだらけの自分のボロ切れの中で少し揺れ動いて]：

アーメン！

キルロイ：アーメン・・・

ジブシー [不安になり]：一さあ、もう十分。

エスメラルダ：そして、ああ、神様、今晚私にあの選ばれた英雄の夢を見させ

て下さい！

ジブシー：さあさあ、お眠り。夢の魔法の絨毯で飛んでお行き。

[エスメラルダは薄織物のテントの張られた簡易ベッドにそろそろ入る。ジブシーは屋根から下りる。]

キルロイ：エスメラルダ！僕の愛しいジブシーの彼女！

エスメラルダ [寝ぼけて]：シッシッ、猫め。

[薄織物の後の明りが段々ぼんやりして来る。]

キルロイ：猫ではない。大きな祭りで選ばれた英雄、キルロイだよ、金のグローブを持つチャンピオンだ、僕の黄金の心臓は胸から切り取られたけど、お前に捧げる為にここに両手に抱いて居るよ！

エスメラルダ：シッシッ。選ばれた英雄の夢を見させて。

キルロイ：ええい、面倒臭い！猫と誤解された。どうすればいいかな、この可愛い娘に本物だと納得させるには？

[三つの真鍮の玉が鮮やかに点滅する。]

——取引をもう一つ、示して居るらしい！

[彼は高利貸しの店に飛び込む。すぐに入口に照明が灯る。]

僕の心臓は純金だ！これと何を交換してくれる？

[宝石、毛皮、スパンコールのガウンなどが、彼の足下に投げ出さ

れる。彼は高利貸しに、バスケットボールをパスする様に、自分の心臓を投げて、その戦利品を引摺むとジプシーの店に急いで戻る。]

可愛い人！この贈り物を見てごらん！僕の金の心臓と交換したんだよ！

エスメラルダ：シッシッ、猫・・・

[彼女は寝入る。キルロイは拳で額を打ち、それからジプシーの店の扉に突進して、両方の拳で戸をドンドン連打する。扉が急に開け放たれ、大きな瓶の中身の糞尿が彼目がけて投げかけられる。息をのみ、口から吐き出し、嘔吐を催しつつ彼は後退する。逃げ戻ると、最後には大げさな絶望の身振りをする。]

キルロイ：ひどいオチだ！カミノ・リアルで、気をもんでお手上げになり、コテンパンに打ちのめされた！挙句の果てに、便つぼの中身で洗礼を受けるとは！——こんな仕打ちはむごい、と誰か弁護してくれたかなあ？！

[キホーテがスラム街の壁に対してピクリと身動きする。咳をして痰つばを吐き、よろよろと立ち上がる。]

ガットマン：おや、あの老いぼれ騎士が目覚めた、やつの夢はもう済んだのに！

キホーテ [キルロイに]：もし、あれは噴水かね？

キルロイ：——ええ、でも——

キホーテ：口中に忌々しい鶏の羽根がな ……

[彼が泉に近付く。泉が流れ出す。キルロイは驚いて後ずさりする、その老騎士は口を漱ぎ、水を飲み、それから水浴びをする為に上着を脱いで、ぼろぼろの衣類をキルロイに渡す。]

キホーテ [水浴びしながら]: ケ・パサ、ミ・アミーゴ? (我が友よ、どうなされた?)

キルロイ: こんな仕打ちはあんまりだと。解りますか、僕の主張?

キホーテ: やつがれ以上に誰がよく解り得ようか、何たるひどい仕打ちかに就いて陳べるのなら。

[彼は歯ブラシを取り出し、歯を磨く。]

——忠告を授けて進ぜようか?

キルロイ: おいおい、カミノのこのどん詰まりで、頂けるならどんなものでも有難く頂戴しますよ!

キホーテ: 断じて! 憐れむなかれ! 汝! 自身を!

[彼は手鏡を取り出し、自分の顎鬚と口髭を手入れする。]

自惚れの傷や、我らの自我が忍耐せねばならぬ数多の侮蔑はな、古びる肉体と疲労困憊する精神に収められて居て、寛大な笑みを以て受け入れられるのがより良き方策なのだ——こんな風に! ——お解りか?

[途方もない満面の笑みを浮かべ、莞爾として顔を二分して見せる。]

ガットマン：あの老いた騎士の顔に、スポットライト！

キホーテ：さもなくば、貴公がなり下がるのは、凝固クリームで満たされた袋なのだ、一所謂レチェ・マラ（傷んだミルク）よー誰もそそれられず、何より貴公自身が好みはすまい。

[櫛と手鏡とをキルロイに手渡す。]

お手前には何か計画がおありかな？

キルロイ [一寸自信が持てず、物欲し気に]：ええ、計画して居たのは——進み続ける事——ここから！

キホーテ：結構！みどもと同行しなされ。

キルロイ [観客に対して]：いかれた年寄りのロクデナシだね。

[そしてこの騎士に]

ドンデ？（どこに？）

キホーテ [階段の方に進み始めて]：キュイエン・サベ！（誰にも解りはしない！）

[泉は今も騒々しく気持ちよく流れて居る。浮浪者達が驚嘆して囁きつつ、そちらへと移動してゆく。マルゲリートがテラスに出て来る。]

キルロイ：おーい、出たぞー！

キホーテ：静かに！お聴きなさい！

[二人は階段の上で立ち止まる。]

マルゲリート：アブドラー！

[ガットマンがテラスに降りて来る。]

ガットマン：マドモアゼル、お客様の為に私にその言伝をさせて下さい。この壮麗な見ものの大団円に少しは私も参加致しませんと、失礼に当りますので。

[広場を横切り反対側の正面に行き、木賃宿『リッツ・メン・オンリー』の窓の下で「カサノヴァ！」と叫ぶ。]

[その間に、キルロイが古代城壁の落書きの「キルロイ参上」の動詞「参上」を消して「北上」の訂正を大文字で書く。]

カサノヴァ！素晴しき愛人にしてカミノ・リアルの寝取られ男の王様！貴方の最後の御婦人が費用を保証して下さり、テラスで朝食を共にしようとお待ちでございます！

[カサノヴァは最初、安宿の実用窓から顔を出し、次いでその薄汚れた戸口から現れる。やつれて、髭も剃らず、しわだらけの衣服を身につけて居るが、これまでと同様、背筋を伸ばし良い姿勢を維持して居る。彼はまばたきをして、朝日のまばゆい光を荒々しく睨みつける。]

[マルゲリートは彼に視線を返す事が出来ない。苦悶と呼んでも決して強すぎる表現ではない様子で、彼女は顔をそむける。しかし、同時に彼の方に哀訴の手を差し延べる。少し躊躇してからカサノ

ヴァは彼女の方に歩み始める、彼のステッキで規則正しく拍子を刻み舗道を打ちながら。横切る際に一度、苦笑を浮かべて観客の方をちらりと見やるのだが、そのゆがめた顔は、現在のカサノヴァよりも遥かに自惚れた見栄坊でも当惑させる体のものだと、白状して居る。彼がマルゲリートに近付くと、彼女は手探りで彼の手を探し、弱い叫び声をあげてそれを握り、発作的に自分の唇に押し当てる。一方、彼は彼女を両腕の中に引き寄せ、すすり泣いて居る彼女の金髪に染めた頭の上方に、落ち着いた暗い視線を送る。瀕死の病人の、その痛みの上にかけた麻酔が運よく効いて居る体の凝視である。]

[キホーテは型通りの所作で槍を持ち上げ、階段からかすれ声で力強く叫ぶ。]

キホーテ：高山のスマレ、岩石を打ち砕けり！

[キホーテはキルロイと共にアーチ型の門を通り抜けて行く。]

ガットマン [観客に対して]：幕切れの台詞が決まりました！

[両袖に向けて]：幕を下ろせ！

[肥満の男特有の優雅なお辞儀をする、丁度——]

[幕]

Camino Real (16 Blocks) by Tennessee Williams

Kazuyasu Hiramatsu

Don Quixote and Sancho Panza appear and play important roles in the prologue and the last block 16 of this fantastic play *Camino Real*. I've been interested in their idealism and realism in English literature. That is why I translated into Japanese the first half of the prologue and the epilogue, where Sancho leaves his master to go home and Quixote keeps sleeping almost to the end and eventually starts for the unknown world with his new squire. This is mostly the fool's dream like a series of odd masquerades, or a symbolic drama about love, death, despair and hope.

The hero Kilroy has no aim or reason to live for. He is persistently tormented by the dictator Gutman and the horrible streetcleaners like secret police. Concerning the social background, this play was first performed in New York in 1953, when the Cold War escalated because Soviet Russia succeeded in conducting an H-bomb test while in the United States McCarthyism became more severe. The audience perhaps felt themselves "in a dark wood where the straight way was lost" from Dante's *Inferno*. Tennessee Williams used the famous phrase as an epigraph for this play. The author seems to make Kilroy lament just like Hamlet that time is out of joint. A certain critic thought the theme of *Camino Real* as Job's reproving and Satan's rising against God. Where there seems to be no virtue, how could a person keep the faith and find hope and love without

self-pity?

According to another critic, Tennessee Williams was “a playwright with romantic mind” who pursued what he would have been, although he was always keenly realizing a sense of frustration, vanity, loss and meaninglessness. However hard the situation was, whether it was political or moral, he struggled for his ideal of beauty and goodness under arms of humor. Don Quixote is a strong ideal figure of romantic mind. He reappears as a hope of unconquerable soul in such works as *Man of La Mancha* or G. Greene’s *Monsignor Quixote* afterwards.

大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語学、外国文学を専攻し担当する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
1. 会 長 1名
 2. 副 会 長 1名
 3. 庶務・編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。
副会長は会長が会員の中から委嘱する。
委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。

第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金その他の収入をもってあてる。

第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

附 則

1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

大阪学院大学外国語論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格
 - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
 - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究ノート、翻訳、書評など。
4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。

ワードプロセッサ使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

和文フォントとして「MS 明朝」、欧文フォントとして「Century」を使用する。

外国語文の場合は A4 判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者によるチェックを受けることが望ましい。
5. 投稿論文の掲載の可否は、2名の査読者による査読結果に基づき編集委員会が判断する。
6. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用を決定する。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。

なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、平成30年10月1日から適用する。

以 上

大阪学院大学外国語論集執筆要領

1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
2. 欧文は1行あきにタイプすること。
3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。

インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)

7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
9. 執筆者校正は2校までとし朱筆のこと。2校以前で校了してもよい。
10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでくに注意されたい。

ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組換料が生じたとき。

イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。

11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

以 上

執筆者紹介（掲載順）

川 本 裕 未 外国語学部 教 授

松 本 和 朗 大阪学院大学 名 誉 教 授

平 松 良 康 商 学 部 教 授

編 集 後 記

ノーベル賞の受賞者が発表されるこの時期、serendipityという言葉を目にする
ことがある。今年ノーベル化学賞に選ばれた吉野彰氏は、2000年にノーベル化学
賞を受賞した白川英樹氏の例を挙げ、誤って1000倍の濃度の触媒を使ったことが
serendipity となり新発見に至ったと述べたうえで、ご自身の serendipity を「時
代の巡り合わせ」だと分析する。

Oxford Dictionary of English によると serendipity とは the occurrence and
development of events by chance in a happy or beneficial way と定義され、1754
年に英国の政治家・小説家の Horace Walpole が、子供の頃に読んだ *The Three
Princes of Serendip* という童話をもとにつくり出した造語だという。童話の中で
は旅に出た王子たちが偶然見つけたものをうまく使って幸運を掴んでいくのである
が、Walpole の意図はさておき、現代では serendipity は「偶然出会った幸運」か
ら「失敗から掴む成功」、はては「些細なチャンスを見逃ごさない洞察力」まで意
味の幅を持って使用されているようである。

主に理系の研究者たちによって好んで使われる serendipity という言葉である
が、小さな偶然によって新発見や成功や幸福がもたらされるということは理系の専
売特許ではない。我々のような文系の研究にもたびたび起こるし、生涯の伴侶との
出会いをはじめ人生そのものが偶然の幸運な出会いでいっぱいである。

本号掲載の論説、研究ノート、翻訳が読者の皆様の serendipity となることを
願っている。

(Y.K.)

大阪学院大学外国語学会役員

会 長 川本 裕未

副 会 長 山口 修

編集・庶務委員 黒宮公彦・中田辰也・安富由季子・吉村京子

大阪学院大学外国語論集 第78号

2019年12月20日 印刷 編集発行所 大阪学院大学外国語学会

2019年12月31日 発行 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

電話 (06) 6381-8434 (代)

発行人 川本 裕未

印刷所 大枝印刷株式会社

吹田市元町28番7号

電話 (06) 6381-3395 (代)

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

No. 78

The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences:
Part 2 Yumi Kawamoto 1

Research Note

A Proposal on Self-Teaching Methods for Learning Foreign
Languages Kazuo Matsumoto 25

Translation

Camino Real (16 Blocks) by Tennessee Williams
..... Kazuyasu Hiramatsu 43

December 2019

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY